

【氏名】手賀 裕輔

【所属大学院】

慶應義塾大学大学院

【研究題目】

ベトナム戦争をめぐる米中関係 1965－1975 年

【研究の目的】

1960年代後半、増大する中国の脅威を封じ込めるために米国はベトナムへの介入を決断した。しかし、1972年には、米国は泥沼化したベトナムから撤退するためにニクソン大統領自ら中国を訪問するに至る。約10年の間になぜのような劇的な変化が生じることになったのか。1972年の米中和解は国際政治史の中でも最も劇的な国際関係の変化の一つとして位置づけられる。本研究は1965年から1975年の米中両国の対ベトナム戦争政策の分析を通じて、相互の脅威認識がどのように変化したかを検証する実証的な国際冷戦史研究である。

現代的な問題に引き付けていえば、ベトナム戦争への関与、南ベトナムの国家建設、泥沼化したベトナム戦争からの撤退についての考察を通じて、現在のアメリカが苦しんでいるイラク問題への大きな示唆が得られるであろうし、地域問題(ベトナム戦争)をめぐる米中間の提携という観点から見れば、本研究の考察は、米中関係によって大きく左右される北朝鮮問題を考える視座を提供することにもなる。

【研究の内容・方法】

本研究は、米中両国のベトナム戦争政策に現れた相互の脅威認識の変化を米中ソ(ソ連)「戦略トライアングル」の分析視角から考察する。ソ連は、米中両国が外交戦略を策定する際に常に意識していた大国であり、ベトナム戦争にも共産主義陣営の盟主として深く関与していたため、ソ連要素を研究の変数に加える必要がある。この分析視角を用いることで国際冷戦史の観点からベトナム戦争を再検討し、それを通じて米中関係の変化を考察することが可能となる。

研究手法としては、近年注目を集めている、複数の国家の史資料を用いて一国の外交政策のみではなく、複数の国家の視点から国際政治史をダイナミックに再構築する「マルチ・アーカイバル」の手法を用いる。具体的には、米国の外交文書を中心としながらも、中国、ベトナム、台湾、日本各国の史資料を駆使して、当時の国際政治を再構築し、検証する。

特に、本研究助成を受けたことで、アメリカにおける資料収集、特にワシントン DC 近郊の国立公文書館、ニクソン大統領文書プロジェクト(NPMP)、ミシガン州アナーバーのフォード大統領図書

館において集中的な史料収集が可能となった。これにより、アメリカ側の認識、政策決定分析に不可欠なホワイトハウス、国務省、国防総省、CIAの公文書を収集することが可能となった。

本研究が扱うベトナム戦争期に、米中関係は上述のような劇的な変化を経験したにも関わらず、従来の先行研究では、その焦点が専ら台湾問題にのみ当てられ、ベトナム戦争の視点からの体系的、実証的分析は存在しなかった。しかし、中国封じ込めのために介入した米国はもちろん、共産主義イデオロギーの正統性をかけ、米国に対抗するために北ベトナムへ軍事支援を行い、非公式ではあるが部隊を派遣していた中国にとって、ベトナム戦争は重要な安全保障問題と認識されていた。特にニクソン政権期の米中接近において、ベトナム問題は重要な役割を果たしたことが両国(特に米国)の政策決定過程を検討することで明らかとなった。アメリカにとって中国はベトナムから撤退し、東南アジアをソ連の脅威から守るために必要であったし、中国も隣接するベトナムへのソ連の影響力が高まるのを恐れていたのである。

【結論・考察】

従来の研究では、ベトナムへ介入し、中国を脅威と認識し続けたジョンソン政権と、中ソ対立を利用して中国へ接近し、ベトナム和平を達成したニクソン政権の対中認識を対照的に捉え、その断絶性を強調する傾向にあった。しかし、本研究によって、ベトナム戦争遂行を通じて米中間に徐々に相互の意図を伝達するための基礎が形成され、ソ連という共通の脅威が増大するにつれて、米中関係の提携への動きを加速することになった、ことが明らかとなった。ベトナム戦争は、米中和解の障害ともなったものの、結局はアメリカが東南アジアから大規模な軍事力を撤退せざるを得ない状況を作り出すことで、中国の対米脅威認識を低下させ、米中関係の改善を大きく促進することとなった。皮肉なことであるが、中国を封じ込めるために始められた戦争が、中国との和解をもたらすことになったのであった。